

オートモーティブ特集によせて

パナソニック（株）オートモーティブシステムズ社

社長 柴田 雅久



パナソニックのカーエレクトロニクス事業の歴史は、1939年に当時の松下無線東京研究所が国内初の自動車ラジオを開発したことに端を発し、その後、1952年にカーメーカーに納入を開始し本格的な事業拡大を開始しました。

以来、カーオーディオ、カーナビゲーションといった多くのカーマルチメディア商品を開発し、最近では、VICSチューナー（Vehicle Information and Communication System 専用チューナー）、車載地デジチューナー、車載Blu-ray^(注1)プレーヤーなどを業界に先駆けて発売するなど、グローバルNo. 1のカーマルチメディアメーカーへと大きく成長しました。当社のカーエレクトロニクス事業は、モータリゼーションとグローバル化の波に乗り順調に成長してきたと言えますが、それはお客様であるカーメーカーの動向や事業環境の変化にいち早く対応してきた結果であるとも言えます。

現在、市場を取り巻く環境は、大きく変化しており、特に新興国の新車需要の急拡大と共に、環境対応車の普及によるクルマのエレクトロニクス化も加速し、市場拡大と技術革新が同時に進行しております。また、他社との競争のステージもグローバル規模となり、技術・商品開発もこれまでに無い開発スピードが求められております。

そうした中で、当社のカーエレクトロニクス事業の課題は、①柱であるマルチメディア事業のさらなるグローバル化の加速と拡大、そして、将来の車載機器統合HMI（Human Machine Interface）化を視野に入れたコックピットシステム事業の構築。②新しい事業の柱と期待する、EV（Electric Vehicle）関連事業の早期立ち上げ。③安全・安心を視点とした自動車の情報化の進展に伴う、無線通信・各種センシング・ネットワーク技術を活用する安全運転支援システムの実用化です。そのために、これら新

規事業分野にも、これまで以上にグループ連携を強化し、パナソニックの幅広い先進技術をフルに活用することで、グループ全体のカーエレ事業の成長をけん引していきたいと考えています。

世界規模での環境対応車の普及拡大に伴いクルマの電子化や電動化、情報化が進み、われわれカーエレクトロニクスメーカーにとって千載一遇のチャンスが到来しています。当社ではEVの普及拡大に貢献すべく、「1回の充電で走れる巡航距離を伸ばす」ことを目標に、省電力な「熱システム」、高効率な「電源システム」、高性能な「電池システム」の開発と、そのシステム全体の制御技術も積極的に取り組んでいます。「家まるごと」で培ってきたグループ全体の省エネ技術の車載化を加速させ、新しいライフスタイルの創造と、車社会の「環境革新」に貢献して参ります。

最後になりますが、当社では、お客様の声を先取りし、どのようなお役立ちができるかを考えながら、事業発展に向けて努力していく中で、お客様とベストパートナーとしてのきずなを深めることが大切と考えます。そのためには、3つのC：Customer Satisfaction, Customer First, Communicationをスローガンに掲げました。特にその中でも、Communicationが最も重要と考え、社会、お客様、当社グループに対して、積極的にコミュニケーションを図って参ります。そして、見て、考えて、行動し、リスクを恐れず新しいことにチャレンジするからこそ志も成し遂げられる。これを肝に銘じつつ、当社グループ挙げた「クルマまるごと事業」の拡大に向けて取り組んで参ります。今回の特集では、「環境分野」から、EVビジネス、その関連技術の各種システム・車載ネットワーク技術、車載デバイスの取り組み事例を、「安全・安心分野」から、各種センシング・ITS・安全運転支援技術について、当社グループの成果をご紹介させていただきました。新規分野での事業取り組みをご理解いただければ幸いです。

(注1) ブルーレイディスクアソシエーションの商標